

FD NEWS

No.29 2010年3月31日
摂南大学 FD 委員会
〒572-8508 寝屋川市池田中町17-8
TEL: 072-839-9106
E-mail: kyomu@ofc.setsunan.ac.jp

摂南大学 

FD 活動の今・・・

全学 FD 委員会 委員 紙 博文 (経営情報学部)

その昔、ある高名な先生は、時間の感覚に乏しいのか、20分遅れで授業をはじめ15分程早く終えてしまうことが常であった。

また、ある先生は、授業の科目と授業内容が異なる、いわば、看板違いの授業をされた。「△△△学」という授業だが、そうではなく、先生が専門とする極々狭い範囲の講義がそこでは行われていた。そしてまた、授業とは関係のない社会的な事件（新聞記事）に対する先生の個人的な見解が述べられる授業というのもあった。

さらに、ある先生は、教えるのではなく、大学教員（自分）は、こんなにも多くのことを知っているのだ、とする“全く理解不能な授業”をされていた。

こうした名（迷）物先生は、当時、大学に何人もいたように思われる。この時代は、シラバスもなく、授業アンケートもなく、ましてや JABEE もない時代、授業が、全く教員目線で行われていた時代であったように思われる。

だが、今は違う。全く違う。こうした授業をする教員は皆無である。教員は皆、学生に自分の講義内容を理解してもらうには、どうすればよいか、工夫し、試行錯誤を重ね、真剣に努力しているのが実際である。これは、これまでの FD 活動の成果である、といえる。

さて、先日、経営情報学部では、学部 FD フォーラムとして、今春、卒業を予定している10人の学生に集ってもらい“わかりやすい授業”というテーマで教員等との意見交換を行った。活発なる意見が出され会場は大いに盛り上がり、“学生のレベルにあった講義の内容、そして講義の展開を図ること”、“授業が教員からの一方通行ではなく、学生・教員共に作り上げる授業であること”、“難しい用語の説明には、たとえ話、これは身近な事例を用いることであるが、多く取り入れ噛み砕いた説明をすること”等、学生から有益なる意見が多く寄せられた。こうした学生参加の FD 活動は今回がはじめてだと思われるが、FD 活動自体が学生に向けられているものであるならば、もう少し早く実施していてもよかつたのではないかと、思う。そして、こうした学生参加の FD 活動は、これからの重要なテーマになるであろう。

本学の FD 活動は8年間の実績がある。8年間、期間の長さだけみれば、本学も既に“充実期”を迎えているはずではあるが、果たしてどうか……。ただ、FD 活動には期間の長短だけで結果を問えないところもある。それは、FD 活動には教員各自の学生に対する“思いやり”“愛情”といった要素が欠かせないからである。よって、今、我々に求められるのは、こうした学生への思いやりと愛情、そして先に述べた昔の授業を反面教師とする態度（姿勢）、それらは最低限必要なのである。

2009 年度後期「学生による授業アンケート」実施結果報告

FD 委員会 (SG1)

I 実施状況

2009 年度の学生による後期授業アンケートは、11 月 25 日 (水) ~12 月 8 日 (火) の 2 週間にわたって実施された。

実施対象は昨年度と同様に、ゼミ・実験・演習および履修者数・回答者数が 10 名以下の科目を除く全授業科目である。アンケートの実施にあたっては、前期に引き続き、授業担当教員は原則回収に関与しない方針を明確化したが、学部・学科の判断に応じて、教員ないし学生がアンケートを回収することとした。アンケートの内容については、前期と同じ質問を行った。

一方、自由記述式の回答欄については、

- 1 この授業の満足できた点：
- 2 この授業の改善すべき点：
- 3 この教室（ 教室）の設備などの改善すべき点：
- 4 その他の感想：

の 4 項目の質問が設けられた。

なお、集計結果の取り扱いに関しては、前期と同様に、①各授業担当教員への結果報告、②各学部・学科への結果報告、③摂南大学内の掲示による公開、④摂南大学ホームページ上の学内公開（工学部は全科目、その他の学部は公開希望科目のみ）を行う。

II アンケート結果の概要

9 項目にわたる質問について、質問ごとにその特色を示す。

(1) 質問 1 : 「この授業にどの程度出席しましたか。」

表 1 出席状況

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
100%	1,729	899	1,224	1,461	637	2,281	2,203	4,267	1,499	16,200
80~100%未満	577	522	511	555	540	2,602	1,931	1,086	1,037	9,361
60~80%未満	129	172	156	211	163	662	491	227	373	2,584
40~60%未満	17	32	25	22	28	86	98	38	89	435
40%未満	13	20	14	16	31	24	56	45	67	286
平均	4.62	4.37	4.51	4.51	4.23	4.24	4.28	4.68	4.24	4.41

100%出席したと回答した学生が多く(全体の 56.1%)、次いで 80~100%出席した学生が多い(全体の 32.5%)。したがって、アンケートに回答した 88%以上の学生が授業回数の 8 割以上を出席していることになる。前期に比べてアンケートの実施日が講義回数の 9 回~10 回目で 1 週早いにもかかわらず全体の出席は 4.51 から 4.41 へと若干減っている。文系学部と B 科及び A 科で出席率が他の理系学部に比べて低いのが特徴であろう。

(2) 質問 2 : 「この授業に意欲的に取り組みましたか。」

表 2 取り組み状況

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	937	404	325	523	349	2,016	1,497	1,953	812	8,816
そう思う	904	691	790	857	588	2,382	2,012	2,161	1,211	11,596
どちらともいえない	462	449	652	666	353	1,010	930	1,144	772	6,438
あまりそう思わない	97	71	106	129	65	156	250	246	175	1,295
全くそう思わない	58	27	54	86	38	78	82	149	86	658
平均	4.04	3.84	3.64	3.71	3.82	4.08	3.96	3.98	3.81	3.92

全学部・学科の平均値は、3.92 で、「そう思う」と「強くそう思う」の割合が高い。なかでも C 科と L 部はともに平均値が 4 を越えている。昨年度及び前期の各学部・学科ごとの回答と比較すると、ほぼ同様の傾向がみられる。しかしながら、全体としては前期は 3.89 であったのが、3.92 と改善している。質問 1 で欠席する率が増えたにもかかわらずやる気は維持あるいは向上していると学生が認識しているということが言える。

質問 1 によると 80%以上出席したと回答した学生がほぼ 90%であったのに比して、質問 2 で「そう思う」および「強くそう思う」と回答した学生は 70%弱に留まっている。両者の間にあまり強い相関関係はみられないことは、質問 1 と質問 2 の間の Pearson の相関係数が 0.40 であることから裏付けられる。

(3) 質問 3 : 「この授業の復習をしましたか。」

表 3 授業の復習

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
大変よくした	455	150	137	184	172	978	695	795	381	3,947
よくした	544	295	358	300	293	1,168	902	906	485	5,251
時々した	907	736	863	810	507	1,826	1,430	1,944	1,025	10,048
あまりしなかった	283	296	369	468	224	892	883	1,082	515	5,012
まったくしなかった	266	165	201	497	200	779	859	926	647	4,540
平均	3.26	2.98	2.93	2.65	3.01	3.12	2.94	2.92	2.82	2.97

この質問に関しては、全学部・学科の平均値は、2.97 と低い値を示しており、授業を復習することに関して消極的な傾向がみてとれるが、昨年(2.72)、前期(2.84)と少しずつではあるが改善している傾向を示している。上記質問 2 と対比してみると、授業に意欲的に取り組んでいる学生が相対的に多い C 科では復習も相対的によく行っている傾向が前期(3.26)から続いている。前期より改善した学部学科は M 科、B 科、L 科、I 科(前期それぞれ 2.52、2.93、2.96、2.85)で他は若干下がっている。

(4) 質問 4 : 「この授業の到達目標を達成できましたか。」

表 4 到達目標

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	501	203	176	318	228	1,547	1,051	1,246	579	5,849
そう思う	765	506	508	655	412	2,027	1,693	1,503	934	9,003
どちらともいえない	924	793	958	984	614	1,750	1,604	2,384	1,232	11,243
あまりそう思わない	150	108	190	169	97	230	304	352	191	1,791
全くそう思わない	119	29	90	122	45	90	119	157	120	891
平均	3.56	3.46	3.25	3.39	3.49	3.83	3.68	3.59	3.54	3.60

全学部・学科の平均値は 3.60 で、昨年(3.36)及び前期(3.47)よりは高い数値を示している。ただ、「どちらともいえない」との回答が最大であることには注目したい。理系学部生にとってはある程度回答しやすい質問であろうが、文系学生にとってやや回答しにくい質問かもしれない。というものの学部・学科間の差異もあまり見られない。

(5) 質問 5 : 「この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか。」

表 5 シラバスの内容

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	616	287	271	385	282	2,148	1,382	1,595	768	7,734
そう思う	859	591	713	706	500	1,996	1,851	1,802	1,126	10,144
どちらともいえない	809	689	808	988	514	1,382	1,356	2,050	985	9,581
あまりそう思わない	88	54	78	98	58	75	113	113	95	772
全くそう思わない	92	23	59	79	40	42	76	80	86	577
平均	3.74	3.65	3.55	3.54	3.66	4.09	3.91	3.84	3.78	3.82

全学部・学科の平均値は 3.82 で、全学部・学科とも平均値に大きなばらつきはない。昨年度(3.59)及び前期(3.72)よりは上向きに推移しており、シラバスに対する意識が徐々に高まっているものと考えられる。L 部が前期(3.94)より更に高くなっているが、共通科目に関してはシラバスには簡単なことしか書いていないため、各教員が学期の初めに詳しいシラバスを配ることが功を奏しているのかもしれない。一般的にシラバスの提出が前年度の 10 月であり、前期後期と引き続いて同じ学生を教える場合など学生のレベルの把握が前期でできるため、シラバスの変更がありうるのにシラバスにこだわると、学部・学科あるいは授業の特質によっては、学生に適応させた内容変更や授業の流れに即した話題の提供などができない。柔軟な対応が必要であろう。質問 4 と質問 5 の Pearson の相関係数は 0.695 と相関関係も綿密であるのは納得できる。また質問 5 に関しても、これまでの質問に関しても工学部の中では C 科が最も評価が高いが、JABEE の導入と関係があると考えられよう。学生の学習態度が積極的であるという点で教員の努力が実を結びつつあるとすることができる。

(6) 質問6:「この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか。」

表6 教員の熱意

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強く思う	683	372	315	454	344	2,782	1,667	2,237	957	9,811
そう思う	834	657	771	855	538	1,929	1,931	1,991	1,133	10,639
どちらともいえない	662	496	634	656	398	745	842	1,162	701	6,296
あまりそう思わない	133	83	128	161	70	123	214	160	150	1,222
全くそう思わない	149	36	83	133	49	75	125	107	115	872
平均	3.72	3.76	3.57	3.59	3.76	4.28	4.00	4.08	3.87	3.95

全学部・学科の平均値は 3.95 で前期(3.89)から少し改善している。具体的には、「そう思う」および「強く思う」を選択した学生が多い。

昨年度および前期の各学部・学科ごとの回答と比較しても、ほぼ同様の傾向がみられる。なかでも、L部、Y部、I部(前期 4.18、3.89、3.94)の平均値は 4.28、4.08、4.00 となっており教員の熱意が上がったと認識されているが、E科、M科、B科で前期(3.63、3.63、3.85)と比べて下がっている。

(7) 質問7:「この授業の担当教員は、授業内容を理解させるための工夫をしていましたか。」

表7 理解させる工夫

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強く思う	629	339	286	423	309	2,656	1,548	2,128	880	9,198
そう思う	783	654	765	736	511	1,902	1,878	1,884	1,068	10,181
どちらともいえない	690	508	621	697	453	810	900	1,205	772	6,656
あまりそう思わない	169	104	153	218	62	166	286	269	185	1,612
全くそう思わない	190	39	107	184	63	118	168	176	157	1,202
平均	3.61	3.70	3.50	3.44	3.67	4.21	3.91	3.97	3.76	3.85

全学部・学科の平均値は、3.85 で前期(3.76)より改善している。この質問についても、L部の平均値は 4 を上回っている(前期 4.06)が、教員が工夫をしていると学生が認識していることがわかる。I部、Y部も前期(3.78、3.74)より改善している。

(8) 質問8:「この授業の担当教員の話し方は、明瞭でわかりやすかったですか。」

表8 教員の話し方

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強く思う	615	334	280	391	317	2,631	1,521	2,002	876	8,967
そう思う	755	599	669	681	477	1,874	1,790	1,812	1,023	9,680
どちらともいえない	694	535	675	706	441	822	950	1,224	783	6,830
あまりそう思わない	178	124	176	256	91	189	310	383	201	1,908
全くそう思わない	219	52	131	226	71	132	209	241	180	1,461
平均	3.56	3.63	3.41	3.33	3.63	4.18	3.86	3.87	3.72	3.79

全学部・学科の平均値は 3.79 で前期(3.69)より改善している。この質問に関しても、L 部の前期(4.06)に引き続き平均値は 4.18 と高い評価を得、I 部、Y 部も前期(3.71、3.65)から改善が見られる。

(9) 質問 9 : 「総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか。」

表 9 総合満足度

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	643	361	307	434	341	2,659	1,588	2,112	888	9,333
そう思う	721	591	662	674	464	1,840	1,748	1,797	1,039	9,536
どちらともいえない	758	556	701	774	471	822	1,033	1,320	799	7,234
あまりそう思わない	149	84	138	197	56	200	248	241	183	1,496
全くそう思わない	189	48	120	175	60	126	162	190	143	1,213
平均	3.60	3.69	3.47	3.44	3.70	4.19	3.91	3.95	3.77	3.84

全学部・学科の平均値は、3.84(前期 3.77)であり、L 部を除く他の学部・学科に大きなばらつきはなく、4 に近づく傾向を見せている。この質問でも L 部の平均値は 4.19(前期 4.05)であり、突出した結果となっている。前期の各学部・学科ごとの回答と比較しても、ほぼ同様の傾向がみられる。

以上、質問 6 から 9 までの回答結果は、昨年度及び前期と同様ほぼ一致した傾向を示している。L 部の学生が概ねポジティブに授業を評価している原因を分析し、全学部学科でシステムの構築を行うことが望まれる。

2002 年度以来の「総合満足度」の経年変化をみると(図 1)、前期・後期とも概して右肩上がりとなっており、満足度が高まっている。2008 年度に一度低下したが、今年度は再度向上している。FD 活動の取り組みに成果が見られると言って良いであろう。図中、後期の総合満足度が一貫して前期のそれを上回っている。この理由は明らかになっていないが、参考として学年ごとの前期・後期の総合満足度(図 2)と学部学科学年別の総合満足度の前期・後期の差(前期-後期)を図 3 に示す。

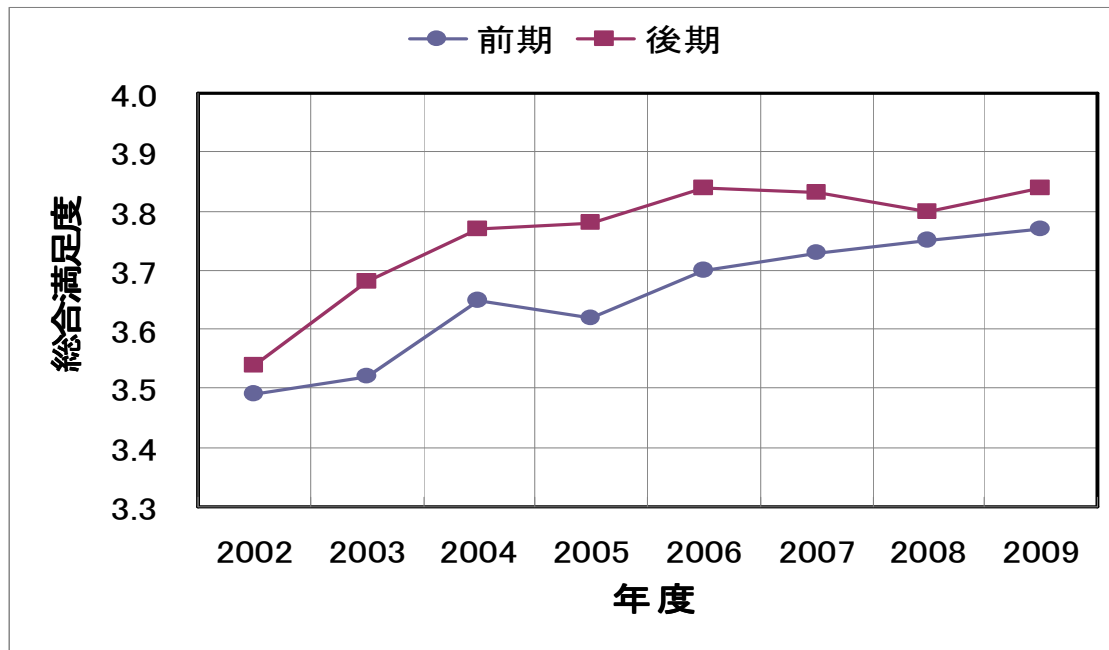


図1 総合満足度の経年変化

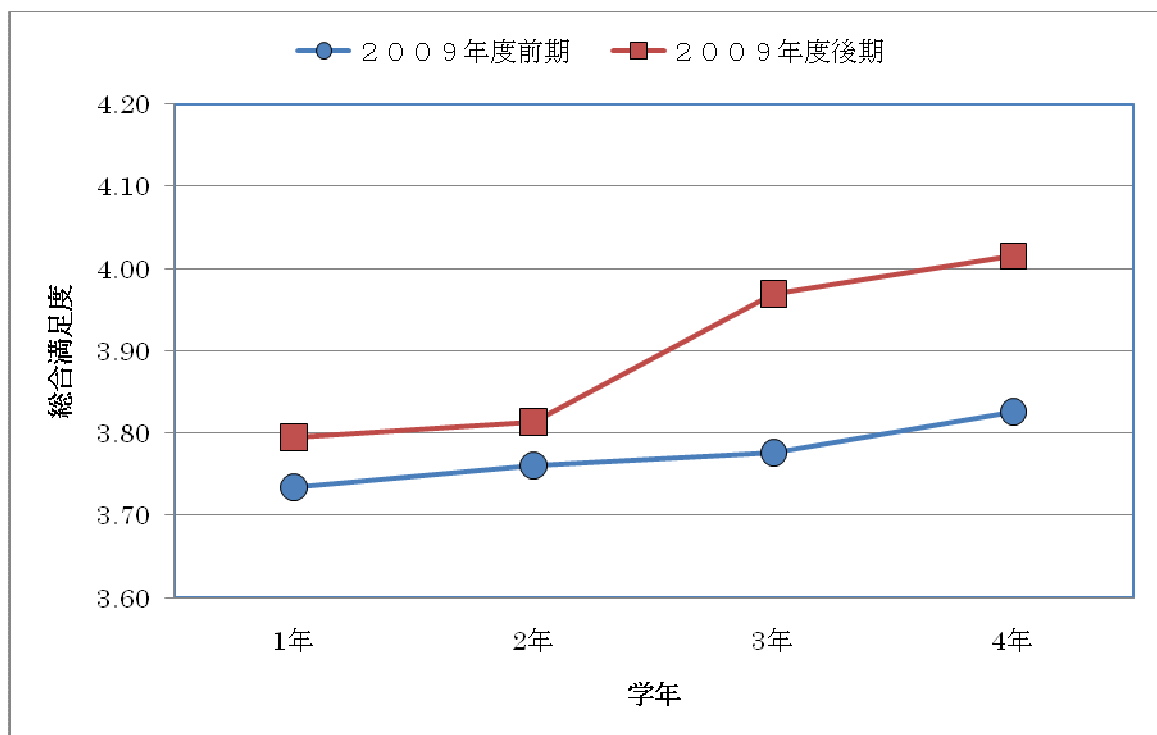


図2 学年別総合満足度



図3 学部学科学年別の総合満足度

C：都市環境システム工学科 A：建築学科
 E：電気電子工学科 M：機械工学科
 B：マネジメントシステム工学科 L：外国語学部
 I：経営情報学部 Y：薬学部 J：法学部

Ⅲ アンケート結果の分析

学生の「総合満足度(質問 9)」と、それをもたらした諸要因について、次の(1)～(7)の項目に分けて分析する。

(1) 受講者数と満足度

表10 受講者数と満足度

	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均
受講者	4.31	3.5	3.88	3.17	3.64	4.38	4.16	0	4.26	4.28
-19										
20-39	3.71	3.83	3.56	3.74	3.79	4.2	3.9	3.82	4.01	3.94
40-59	3.69	3.7	3.45	3.1	3.68	4.13	3.9	4.08	3.9	3.77
60-79	3.68	3.43	3.53	3.6	3.65	4.15	3.93	3.94	4.06	3.76
80-99	3.32	3.5	3.34	4.11	3.54	3.92	3.95	0	3.92	3.68
100-119	3.21	3.81	3.05	3.43	0	4.34	3.9	3.86	3.65	3.78
120-139	0	3.66	3.67	2.97	0	3.88	3.94	3.99	3.82	3.82
140-159	0	0	0	0	0	4.14	3.63	4.01	3.8	3.88
160-179	0	3.64	0	2.9	0	4.15	0	4.14	3.5	4
180-199	0	0	0	0	0	3.85	0	0	3.28	3.6
200-	0	0	0	0	0	0	3.27	3.73	3.32	3.57
計	3.6	3.69	3.47	3.44	3.7	4.19	3.91	3.95	3.77	3.84

全体の傾向としては、全学部・学科の平均値が、3.84 であるのに対して、受講者数 20 人未満のクラスでは4.28、20-39人のクラスでは3.94と平均値が高めになっている。一方、受講者数が 40 人から 119 人は若干平均値が下がるが、120 人以上 179 人のクラスはまた

平均が高くなっている。前期と比べ、180人以上の満足度は下がっているものの、全体的には満足度は上がっている。しかしながら、A科、M科、Y部は全体の傾向と若干異なる。

(小・大人数のクラスは母集団の数が少ないため、誤差が生じる可能性がある。)

(2) 教員年齢と満足度

表 11 教員年齢と満足度

	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	
年齢	3.89	3.53	0	3.86	3.88	4.24	4.22	4.45	3.95	4.17
-30										
30-34	3.63	3.88	3.63	3.46	3.68	4.26	4.02	4.33	3.57	3.95
35-39	4.01	3.78	4.07	3.9	4	4.32	4.07	4.4	3.99	4.09
40-44	3.84	3.72	3.26	3.83	3.54	4.32	3.78	4.06	3.87	3.92
45-49	3.77	3.75	3.5	3.88	3.75	4.25	3.83	3.35	3.93	3.98
50-54	3.61	3.71	3.65	3.62	4.14	4.2	3.96	3.94	4.11	3.92
55-59	3.29	3.38	3.27	3.42	3.53	3.91	3.89	3.75	3.47	3.6
60-64	3.6	3.81	3.45	2.89	3.69	3.95	3.83	3.91	3.66	3.76
65-69	3.03	3.58	3.44	3.25	3.68	4.24	3.6	4.35	3.74	3.54
計	3.6	3.69	3.47	3.44	3.7	4.19	3.91	3.95	3.77	3.84

従来の調査結果では、全般に比較的学生と年齢の近いつまり若い教員に対する満足度が高いとの傾向があった。後期も同様な傾向が見てとれるが、54歳までの教員は前期より健闘しているという結果が出ている。(各学部・学科の年齢階層によっては該当する教員が数人である場合もあることから、母集団の数が少ないために統計的な誤差が生じる可能性があることにも注意しておかなくてはならない。)

(3) 職階と満足度

表 12 職階と満足度

	職階	科									計
		C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
		A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	
		平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	
区分	職階	3.55	3.63	3.34	3.32	3.67	3.91	3.78	3.92	3.59	3.69
専任	教授										
	准教授	3.6	3.77	3.59	3.88	3.72	4.21	4.08	4.21	3.84	3.96
	講師	3.55	3.53	3.48	3.48	3.54	4.28	3.73	3.97	3.92	3.9
	計	3.57	3.68	3.47	3.38	3.67	4.11	3.89	3.98	3.74	3.81
非常勤	職階	3.71	3.7	3.47	3.63	3.76	4.27	3.94	3.85	3.84	3.9
	講師										
	計	3.71	3.7	3.47	3.63	3.76	4.27	3.94	3.85	3.84	3.9
計		3.6	3.69	3.47	3.44	3.7	4.19	3.91	3.95	3.77	3.84

昨年あるいは前期の調査結果では、教授に比べて専任講師と専任准教授の満足度が高かった。後期もほぼ同様の結果がみられる。教授がなぜ評価が低いのかについてもう一段階ふみこんだ分析を行う必要がある。

(4) 授業時限と満足度

表 13 授業時限と満足度

	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	
時限	3.47	3.65	2.98	3.06	3.73	4.21	3.85	4.04	3.91	3.92
1										
2	3.54	3.72	3.52	3.35	3.57	4.16	3.92	4.06	3.75	3.84
3	3.37	3.59	3.41	3.62	3.76	4.17	3.93	3.5	3.72	3.77
4	3.85	3.87	3.57	3.56	3.82	4.22	3.88	3.73	3.69	3.86
5	3.9	3.59	3.42	3.52	3.92	4.33	4.18	4.11	4.06	3.82
計	3.6	3.69	3.47	3.44	3.7	4.19	3.91	3.95	3.77	3.84

全学部・学科において各時限における満足度のばらつきはほとんどなかった。この傾向は昨年度・前期とほとんど変わっていない。本表にしたがえば、カリキュラムの時限よりも、授業内容そのものが満足度につながっているものと読み取ることができる。しかし、前期同様、L部、Y部、J部の学生に関しては朝の通勤ラッシュをくぐりぬけてきた1時限の授業の満足度が高かった。1時限の授業があるいは学生のコンディションがどういふ点で他の時限の授業と比べて満足度を高めているのかを分析することは必要であろう。

(5) 選択・必修科目と満足度

表 14 選択・必修科目と満足度

	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	
履区	3.59	3.66	3.49	3.46	3.7	4.19	3.9	4.01	3.78	3.88
選択										
必修	3.64	3.81	3.33	3.39	3.65	4.47	4.02	3.12	3.66	3.58
計	3.6	3.69	3.47	3.44	3.7	4.19	3.91	3.95	3.77	3.84

前期は選択が 3.80、必修が 3.56 だったので若干差が開いており、選択に対する満足度が高くなっている。Y部ではこの差が顕著である。一方C科、A科、L部、I部では逆転している。このように、学部・学科間のばらつきが大きいところをみると、選択と必修以外の要因が作用している可能性もあるし、学部学科によっては必修・選択のあり方が異なる可能性もある。

(6) 分野別教科と満足度

表 15 分野別教科と満足度

	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	A9	
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	
分類	3.54	3.72	3.41	3.43	3.68	4.19	3.9	4.08	3.69	3.87
専門										
専門	3.82	3.48	3.52	3.18	3.46	0	0	0	0	3.49
基礎	3.72	3.72	3.64	3.73	3.9	0	4.16	3.83	0	3.79
教養	3.45	0	3.54	3.42	3.7	4.13	3.89	3.45	3.96	3.84
教職	0	0	0	0	0	4.46	0	0	4.18	4.37
計	3.6	3.69	3.47	3.44	3.7	4.19	3.91	3.95	3.77	3.84

各教科を「専門」、「専門関連(専門、工学部のみ)」、「基礎」、「教養」、「教職」の5分野に分けて分析した。「専門関連」の満足度が若干低いのと「教職」の満足度がかなり高いという点を除いて、他の教科は大きなばらつきはなかった。

(7) 質問項目と満足度との相関

各質問の間の関係を分析するために、Pearson の相関係数を求めている。ここでは主として総合満足度と各個別質問の間の関係に焦点をあてて考察する。第1に、「出席率(質問1)」とはほとんど相関がない(0.18)。第2に、「復習頻度(質問3)」については若干の相関が見られる(0.39)。第3に、「取り組み状況(質問2)」、「到達目標の達成状況(質問4)」および「シラバスの内容(質問5)」は、それぞれ0.58、0.65、および0.66であって、ある程度の相関が見られた。最後に、「教員の熱意(質問6)」、「理解させる工夫(質問7)」および「教員の話し方(質問8)」は、それぞれ0.77、0.81、および0.83であって、かなり高い相関が見て取れた。前期の結果より更に相関関係が強まっている。

したがって、「教員の熱意(質問6)」、「理解させる工夫(質問7)」、および「教員の話し方(質問8)」を一層改善していくことが満足度をあげていくために必要である。実現可能な方策を学部学科のFDフォーラムなどで情報交換することによって、個々の教員が授業に取り入れていくこと望まれる。

IV むすび

2009年度後期に実施した授業アンケートを分析することにより、次のような結果が得られた。

- (1) 前期より授業に対する評価がすべての面で改善している。
- (2) 学生評価の平均値がきわめて高いのは「自分の出席状況」で4.41となっている。しかし、学部・学科間で差異が見られる。文系学部とB科及びA科で他の理系学部に比べて低い。
- (3) 学生評価の平均値が低かったのは、「復習をしたか」で2.97となっている。しかし、前記(1)と同様に学部・学科間で差異が見られる。
- (4) 全般的な傾向としては、受講者数が40人未満の少人数クラスの満足度が高いことがわ

- かる。しかし、本項目についても各学部・学科間でばらつきがある。
- (5)教員の年齢が上がるにつれて満足度は下がるという相関関係はある程度認められた。しかしながら 54 歳までの教員は前期より健闘している。一方、職階と満足度との関係では、教授に比べて専任講師と専任准教授の満足度が高い。
- (6)授業の開講時限、分野別教科と満足度との間には特に際立った相関は認められない。一方、選択・必修科目と授業満足度の間には若干の差異が見られる。しかしながらこれらも学部学科の特徴が見られる。
- (7)全体の集計結果によると、「教員の熱意」、「理解させる工夫」、「教員の話し方」および「満足度」との間には相当程度の相関関係が見られる。

最後に、本調査結果に基づいて次の 4 点について指摘しておきたい。

第 1 は、2002 年度に学生による授業評価が実施されて以来、FD 活動が授業内容の改善に一定の効果をもたらしてきたと言える。

第 2 は、教員の熱意、理解させる工夫、教員の話し方および授業満足度との間に相当程度の相関が見られることである。どうすれば学生に個々の教員の努力が伝わるかを今後も真摯に考え工夫をしなければならない。L 部の学生の高い満足度を見る限り、更なる改善の余地はある。個々の教員の授業のパフォーマンスの向上だけでなく、全学部をあげたシステムティックな改善を模索したい。

第 3 に、多くの科目で前期に引き続き学生がアンケート用紙を回収し事務室に提出するという学生参加型のアンケート調査が行われた。FD 活動のあり方が一歩前進したという点で評価できよう。

第 4 に、工学部の中でも唯一 JABEE の認証を受けている C 科の学生が積極的な学習態度を示していることが明らかになった。これは JABEE の取り組みの中で、教員の努力が教育現場でプラスの結果として現れているということが言える。

以 上

「授業公開に関するアンケート」実施について

全学 FD 委員会 SG2 リーダー 太田義器 (外国語学部)

FD 活動の一環として行ってきた授業公開について、その是非および成果についての教員間のコンセンサス形成の一助となることを期してアンケートを実施した。

予告期間が短い中、回収率は T 部(77.27)、L 部(61.2)、I 部(66.6)、Y 部(64.0)、J 部(39.13)、全体(65.12)と比較的高かった。授業公開についての態度は、全体で肯定的(49)、否定的(16)、どちらともいえない(31)、無効(4)とおおむね肯定的であった。

肯定的な態度の理由としては、「他の教員の自分とは違う授業方法や構成を知ることができるため」(91.18)、「他の教員から自分の授業方法についてのアドバイスをもらうことができるため」(55.88)が、否定的な態度のそれは、「FD 活動の実績を対外的に示す形式的なものでしかないから」(72.73)、どちらとも言えない態度のそれは、「授業公開の目的がはっきりとしないため」(61.36)、「授業公開のそのものの意義は認めるが、今のやり方には賛成できないため」(45.45)が顕著な結果であった。

※文中()内はそれぞれの回答の%である

【質問項目】

【1】 授業公開の実施についてのあなたの態度は、次の3つのうちのどれですか

A：肯定的である、 B：否定的である、 C：どちらともいえない

【2】

① 肯定的な方（【1】でAを選択） ⇒ 上記表にて **1-A** と記載

その理由として以下にあてはまるものがありますか(複数可)

- A：他の教員の自分とは違う授業方法や構成を知ることができるため
- B：学生を指導する上での苦勞を教員同士で共有することができるため
- C：他の教員から自分の授業方法についてアドバイスをもらうことができるため
- D：見学者がくることで、受講学生と担当教員が一つの授業構成員として協力する雰囲気ができるため
- E：つねに誰に見られても恥じることのない授業を行っているため
- F：FD活動の実績を対外的に示すうえで有効なものであるから
- G：その他（解(回)答カードの裏面を利用いただき、自由に記述ください）

② 否定的な方へ（【1】でBを選択） ⇒ 同 **1-B** と記載

その理由として以下にあてはまるものがありますか(複数可)

- A：専門が異なる他の教員の授業を見学しても、とくに参考になるとは思われないので
- B：専門が異なる他の教員から、有意義なアドバイスが得られるとは思われないので
- C：見学者がいると、緊張して授業をうまく進行する自信がない、あるいは学生の主張力を妨げられるため
- D：公開授業のために、特別に授業準備をしなければならず、通常の授業運営が妨げられるため
- E：FD活動の実績を対外的に示す形式的なものでしかないから
- F：授業公開の経験がないため
- G：授業改善に興味がないため
- H：その他（解(回)答カードの裏面を利用いただき、自由に記述ください）

③ どちらとも言えない方へ（【1】でCを選択） ⇒ 同 **1-C** と記載

その理由として以下にあてはまるものがありますか(複数可)

- A：授業公開そのものの意義は認めるが、今のやり方には賛成できないため
- B：授業公開の目的がはっきりとしないため
- C：その他（解(回)答カードの裏面を利用いただき、自由に記述ください）

—自由記述についてお詫び—

アンケートに関して、自由記述の記載がありました。いずれも授業公開に関する貴重なご意見でしたが、紙幅の関係上、ここに掲載することができなかったことをお許しください。なお、それらについては、次号以降に掲載したいと考えておりますので、ご期待ください（編集部）。

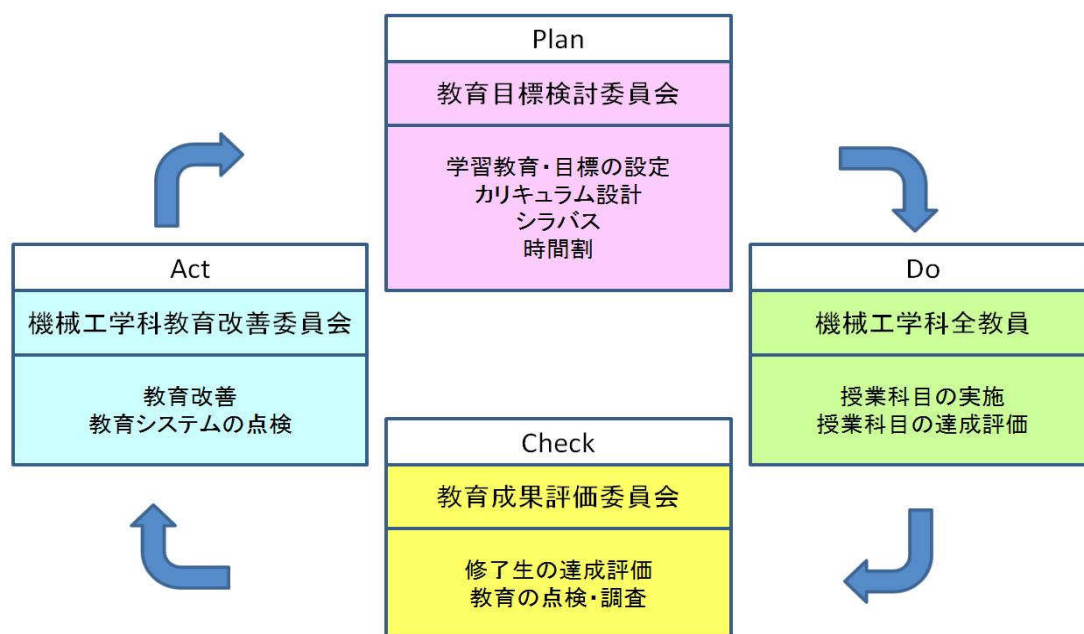
今回、機械工学科より技術者教育の取り組み方針に関する一文が寄せられました。

工学部 機械工学科における技術者教育への取り組み

工学部 機械工学科

工学部機械工学科では、建学の精神に謳われている「理論に裏付けされた実践的技術をもち、現場で活躍できる専門職業人の育成」を目指し、「機械生産コース」と「機械工学総合コース」を設けて技術者教育に取り組んでいます。一方、大学における教育の質の保証が重要な課題となっており、理工系の学科においては技術者教育の質向上を図るため、日本技術者教育認定機構（JABEE）による技術者教育の認証評価が行われています。本学科ではこの認証評価を「機械工学総合コース」の教育プログラムに対して受けるべく準備を進めています。まず、学科内に教育改善のPDCAサイクルを実施するための組織（下図参照）を立ち上げるとともに本教育プログラムの学習・教育目標を下表（次頁参照）のように定め、カリキュラムを改めました。今後は2013年度のJABEE受審に向け、本教育プログラムを実施・評価するとともに技術者教育の質向上のための改善サイクルを回していくことになります。

本教育プログラムの実施にあたっては、教員の教授・指導のもとに行った学習時間の保証、学習・教育目標の達成度の評価が必須となります。従いまして、その方法および裏付けとなるエビデンスの保存などに関して、他学部ならびに理工学部基礎理工学機構（2010年度改組予定）の先生方のご協力が不可欠です。また、教育環境などに関して学園・大学の関係部署、本教育プログラムの教育改善システムの点検・評価に関して学内外のご支援をお願いせねばなりません。本教育プログラムにはまだまだ改善すべきところが多々あると思いますが関係各位のご助言、ご協力を切にお願いする次第です。



教育改善システム

機械工学総合コースの学習・教育目標

記号	学習・教育目標
A 1	エネルギー・環境問題などの人類、社会の抱えている問題を理解できる。
A 2	チームにおいて、それぞれの役割を担い、チームの目標を達成するために働くことができる。
A 3	目的を達成するために、粘り強く、自律的に学習できると共に倫理的な判断・行動ができる。
B 1	情報技術に関する知識を持っており、それを機械システムの問題解決に応用できる。
B 2	言語（日本語ならびに簡単な英語の音声および文字）と図表などを用いて確かなコミュニケーションができる。
C 1	専門知識の理解を深めるための工学に共通する基礎的な考え方や知識を持ちそれらを応用できる。
C 2	機械工学の基礎に関する知識を持ち、それらを工学的問題の解決に応用できる。
D 1	工作機械を使つての機械加工ができる。
D 2	各種物理量や工業量を計測できる。
D 3	製図法を理解し、物体を図面に表すことができる。
E 1	機能、強度、性能などを考慮して機械要素または機械システムをデザインすることができる。
E 2	実験（シミュレーションを含む）を計画ならびに遂行し、得られたデータを解釈することができる。

編集後記

* 今年度もFD ニュースは3回の発行になりました。以前は、4回、発行されたこともあったように思います。しかしながら、頁数からみると、前回（第28号）、今回（第29号）と少し厚めの16頁の冊子となっています。前回では、昨年8月4・5日に本学ではじめて実施された教職員ワークショップの実施状況を“速報”として掲載しました（後に「実施報告書」が発行されている）。このようにFD活動の実施状況を素早く知らせることもこの「FD ニュース」の役割といえるでしょう。なお、FD ニュースには弱点もあります。それは形式的なものです。発行条件として4頁の倍数の頁数で発行するというものです。このため、発行頁数に合わせるため、集めた記事を切り刻むこともときには必要になります。そこが少し頭の痛いところでもあります。

* FD委員会のH・P(摂南大学のFD活動Webサイト)が4月から新しくなります。SG3の片田先生(工学部)にご尽力をいただきました。アクセスは本学のH・P、“教育システム”から入り、次に“FD活動”をクリックし、“摂南大学のFD活動Webサイト”のボタンを押します。とても素敵なH・Pとなっています。ご覧下さい。

* 皆様からのご意見を紙面でも紹介したいと考えています。随時、メールで結構ですから、FD委員もしくは教務課 (kyomu@ofc.setsunan.ac.jp) までお寄せ下さい。